TEL
03(3545)0131

超音波検査である液体をゴクリと飲むと…

膵臓がん早期発見の新兵器

難治がんの典型といわれる膵臓がん。年間の死亡者数は罹患者数にほぼ匹敵し、患者の生存率は極めて低い。大阪府立成人病センター副院長の片山和宏医師はこう話す。

「実は膵臓がんの5年生存率は1センチで見つかれば約80%、2センチでも50%くらいあり、早期に手術で切除できれば治療成績は悪くありません。問題は早期発見が難しく、ほとんど見つからないことにあります」

膵臓がんは、1センチくらいまでは膵臓の中にとどまり、痛みを感じない。大きくなり、膵臓の外に顔を出して周囲の神経に浸潤すると、不快感や鈍痛が出てくる。痛みが強くなるのは、もっと大きく広がってからだ。

胃の空気が検診の妨げ

なぜ早期に検診で見つけられないのか。片山医師は言う。

「おなかの中の小さいがんは、CT(コンピューター断層撮影)やMRI(磁気共鳴断層撮影)よりも超音波検査のほうが見つけやすいんです。ところが、空気は超音波を通しにくい性質があるので、空気をたくさん含む胃の後ろ側にある膵臓は半分程度しか見えません。そこにがんがあれば見逃してしまうんですね。膵臓に対応した特殊な内視鏡を使えば発見できますが、何の症状もない人に検診で実施するにはハードルが高すぎます」

放射線被曝も苦痛もない超音波で、なんとか膵臓全体を見られないものか――。

同センター検診部のスタッフがたどり着いた答えが、「超音波検査の時にミルクティーを350ミリリットル飲む」という方法だった。ミルクティーで胃を満たすことで、胃の中の空気が移動して超音波が通りやすくなり、膵臓の90%前後まで見えるようになったのだ。

「いろいろな飲料を試しました。炭酸飲料や窒素を充填しているアルミ缶の飲料は、胃の中に入ると細かな泡が邪魔になる。柑橘系のレモンティーは、胃液と反応してかえって見えなくなる。ミルクティーの適度な濁り具合が、ちょうどいい程度に超音波を通し、くっきり見やすくなるとわかりました」(片山医師)

通常の超音波検査は10分程度で終わるが、「膵精密エコー」と名付けたこの検査では、40分程度かけて丁寧に見ていく。患者の姿勢を変えながら十分観察した後にミルクティーを飲用してもらい、さらにくまなく膵臓を見る。

患者の8割は手術可能

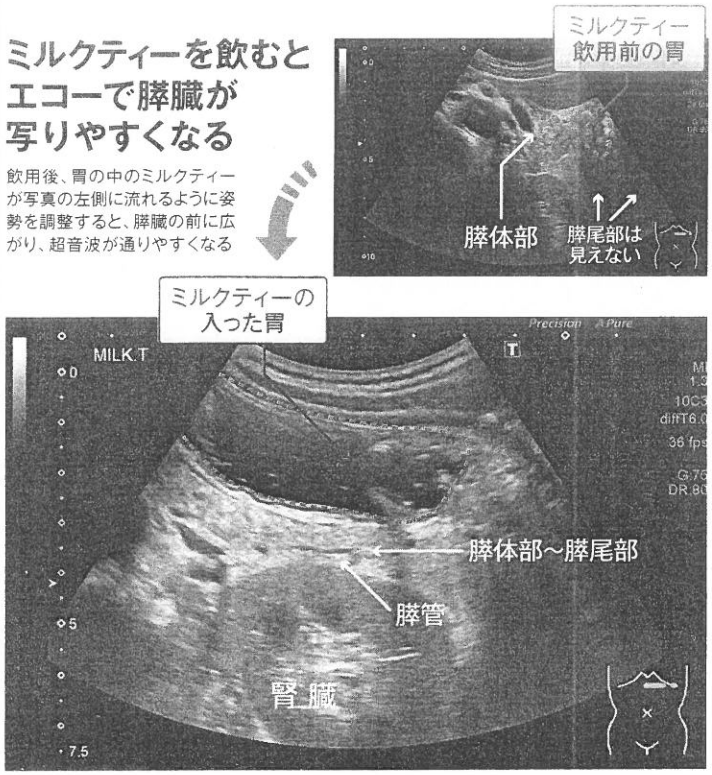
「がんが見つからなくても、液体がたまった『膵嚢胞』という袋が見えることがあり、これがあると膵臓がんができるリスクが22倍に高まることがわかっています。そこで膵嚢胞が見つかった人は内視鏡などの精密検査を追加し、超音波では見えなかったごく小さながんを見つけることもできています」(同)

大阪府立成人病センターでは、膵臓がんのリスクが高い人を対象に臨床試験として膵精密エコーを実施しており、2007年から13年までに検査した625人のうち、16人に膵臓がんが見つかった。そのうちごく早期の0~I期が68・8%で、III期の12・5%と合わせると、手術が可能なIII期までに見つかった人が8割を占めた。日本膵臓学会の全国登録患者では0~I期はわずか2%、III期までに見つかった人は約20%にすぎない。

「ミルクティーで膵臓が見やすくなるとはいえ、画像を見る技師の技術力が必要ですし、通常よりも時間がかかるなど、一般検診のように多人数を対象とした検診で実施するには課題も多い。少しずつ実施施設を広げていければと考えています」

そう語る片山医師によれば、急に血糖値が悪化するなど、意外なきっかけで膵臓がんを早期発見できることもあるという。ふだんから血糖値には注意したほうがよさそうだ。

ライター　熊谷わこ



「キリン 午後の紅茶 あたたかいミルクティー」(345ミリリットル)を少し温めて飲む。ホット用のペットボトルは、酸素を通しにくい構造で、飲用後に胃の中で泡ができにくい。スチール缶の「伊藤園 お～いお茶 緑茶」(340グラム)も、飲用後に泡ができにくく、代用することがある

photo　片山和宏医師提供(上)　キリン、伊藤園提供(下2点)